報　　告

短期大学生における自閉症の認識度に関する検討

田　崎　勝　成

〔論文要旨〕

短期大学生を対象に質問紙調査を行い，小児に関して専門的に学習する群と学習しない群とに分けて，自閉症に関する認識度を検討した。自閉症という用語や自閉症の原因について，学習群と非学習群との間で比較したところ，いずれも有意な差が認められた。自閉症を何で知りましたかという問いに対しては，授業のみの項目で有意な差が認められた。また自閉症の症状については，こだわりがある，パニック，オウム返し，奇声の4項目が非学習群と比較して，いずれも他の症状より顕著な差が認められた。

Key words：自閉症，認識度，短期大学生

Ⅰ．目　　的

自閉症については，その本態と原因の究明に関して多くの研究が行われてきている[1)~3)]。

しかしながら，自閉症という用語は知っていても実際にどのような障害なのか症状・原因等をはじめとした正しい知識を持っている人は，少ないと考えられる。

また，専門家の間では，一般社会のなかに自閉症に対して誤解があることについては意見の一致するところと考えられる。しかし，どのような誤解であるのか，について明確に示された報告は少ない[4)5)]。

また，このような誤解に関しては，自閉症に対する正しい知識を提供できる専門家の指導により，一般社会に自閉症に対する誤解が生じないようにしていかなくてはならない。そのためには，自閉症に対する正しい知識を持った専門家の養成が必要である。特に，短期大学における専門職養成課程において，小児の障害に関する正しい知識を得る機会として小児保健や精神保健などの専門科目の授業を受講することが重要ではないかと考える。

そこで本研究では，専門職養成課程において，小児の障害に関する専門科目を履修することにより，どの程度自閉症に関する正しい知識を身につけられるのかどうかを検討した。

Ⅱ．研究方法

1．調査対象および調査時期

岐阜県内の短期大学に在籍する263名の女子学生を対象とした。平成16年11月上旬，調査用紙を配布し，無記名の自記式回答を求めた。

2．調査内容

調査内容は①自閉症という用語を知っているか，②自閉症を何で知ったか（①で答えた人のみ），③自閉症に関する症状および自閉症に関する用語で知っているもの（23の選択肢），④自閉症の原因，⑤自閉症に対する自分の認識度，⑥～⑨自閉症以外の障害に関する用語を知っているか（ADHD，LD，軽度MR，てんかん）の9項目である。研究の対象となった学生には，研究の趣旨と内容，またプライバシーの厳守と研究の目的以外にはデータを使用しないことを説明し，無記名であることも伝えた。本研究に

A Study on the Degree of Recognition of the Autism in the Junior College Student　〔1925〕
Katsunari TASAKI
岐阜聖徳学園大学短期大学部（研究職）
受付 07. 4.10
採用 07. 7.25
別刷請求先：田崎勝成　岐阜聖徳学園大学短期大学部　〒500-8288 岐阜県岐阜市中鶉1丁目38番地
Tel/Fax：058-278-4165

Presented by Medical*Online

同意した学生から回答を得た。

3. 処理および分析方法

データの集計および分析にはExcelを使用した。有意差の判定には対応のないt検定，χ^2検定またはMann-Whitney検定を用いて5％，1％および0.1％有意水準で行った。

Ⅲ. 結　　果

今回，調査結果については，小児に関して専門的に学ぶ学生群（学習群）と学ばない学生群（非学習群）とに分けて比較した。なお，学習群は保育士・幼稚園教諭あるいは養護教諭という小児に関する専門家を養成する学科に所属する学生であり，非学習群は主として情報関係や栄養士関係の学科に所属する学生とした。

1．対象の背景

対象の背景を表1に示す。対象者の平均年齢は学習群が19.4±0.7歳，非学習群が19.2±0.8歳であり，有意差は認められなかった。

また，自閉症という用語を知っていますかの問いについて，学習群は「はい」という回答が100％であったのに対して，非学習群では91.8％であり，自閉症という用語の認識度に違いが認められた（χ^2=11.05，df＝1，p＜0.001）（表1）。

2．自閉症を何で知りましたかについての項目

学習群では授業（94.6％），非学習群はテレビ（78.4％）が最も多く，学習群と非学習群との間では，授業の項目にのみ有意な差が認められた（χ^2=196.1，df＝1，p＜0.001）（表2）。

表1　対象の背景

項　目		学習群（129名）	非学習群（134名）
平均年齢±標準偏差		19.4±0.7	19.2±0.8
自閉症という用語を知っていますか	はい	129（100）	123（91.8）
	いいえ	0（0.0）	11（8.2）

平均年齢：歳
人数（％）
n＝263

表2　自閉症を何で知りましたかについての項目

項　目	学習群（129名）	非学習群（134名）	検定
テレビ	100（77.5）	105（78.4）	NS
雑　誌	6（4.7）	6（4.5）	NS
新　聞	13（10.1）	10（7.5）	NS
漫画本	26（20.2）	18（13.4）	NS
授　業	122（94.6）	11（8.2）	p＜0.001
その他	12（9.3）	20（14.9）	NS

人数（％）
n＝263

また，非学習群でも授業で知ったという回答が得られており，高校までの授業で知ったという回答であった（表2）。

3．自閉症の症状および自閉症に関する用語についての項目

自閉症の症状および自閉症の用語について知っているものに関する複数回答では，学習群で，こだわりがある（94.6％），パニック（92.2％），オウム返し（82.9％），奇声（78.3％）が多くみられ，非学習群ではパニック（70.1％），耳ふさぎ（48.5％），奇声（44.8％），こだわりがある（39.6％）が多くみられた。なお，学習群で多くの回答が得られた，こだわりがある，パニック，オウム返し，奇声の項目については，いずれも非学習群と比較して有意な差を認めた（p＜0.001）（表3）。

4．自閉症の原因についての項目

自閉症の原因については，「脳の障害」が正解である。学習群が96.1％の正解率であるのに対して非学習群は71.6％であり，有意差が認められた（χ^2=24.20, df＝1，p＜0.001）（表4）。非学習群では，自閉症の原因があまり理解されていないことがわかった。

5．自閉症に対する認識度に関する項目

自閉症に対する認識度では，理解している・少し理解している・普通，までを理解している範囲とした。その結果，学習群では86.0％，非学習群では36.6％となり，認識度に有意な差が認められた（χ^2=67.54，df＝1，p＜0.001）（表5）。

Presented by Medical*Online

表3　自閉症の症状および自閉症に関する用語についての項目

項　目	学習群（129名）	非学習群（134名）	χ^2	検定
オウム返し	107(82.9)	25(18.7)	108.7	p＜0.001
パニック	119(92.2)	94(70.1)	20.85	p＜0.001
耳ふさぎ	96(74.4)	65(48.5)	18.59	p＜0.001
肌触りの好き嫌い	42(32.6)	15(11.2)	17.67	p＜0.001
サヴァン症	2(1.6)	3(2.2)	0.167	NS
カナー症候群	26(20.2)	1(0.7)	26.88	p＜0.001
高機能自閉症	71(55.0)	6(4.5)	81.15	p＜0.001
アスペルガー症候群	96(74.4)	3(2.2)	145.9	p＜0.001
抑制がない	26(20.2)	20(14.9)	1.246	NS
こだわりがある	122(94.6)	53(39.6)	89.37	p＜0.001
奇声	101(78.3)	60(44.8)	31.10	p＜0.001
クレーン現象	27(20.9)	2(1.5)	25.31	p＜0.001
攻撃性	70(54.3)	40(29.9)	16.10	p＜0.001
体を揺する	86(66.7)	48(35.8)	25.02	p＜0.001
手をバタバタさせる	53(41.1)	44(32.8)	1.921	NS
ぐるぐる回り	42(32.6)	20(14.9)	11.34	p＜0.001
首振り	49(38.0)	21(15.7)	16.75	p＜0.001
抱っこ嫌い	54(41.9)	20(14.9)	23.58	p＜0.001
痛みに鈍感	31(24.0)	17(12.7)	5.669	p＜0.05
独特の視線行動	68(52.7)	31(23.1)	24.50	p＜0.001
連続耐久小走り	10(7.8)	1(0.7)	8.049	p＜0.01
連続耐久ジャンプ	21(16.3)	4(3.0)	13.50	p＜0.001
広汎性発達障害	74(57.4)	1(0.7)	103.4	p＜0.001

人数（%）
n＝263

表4　自閉症は何で起こると思いますかの項目

項　目		学習群（129名）	非学習群（134名）
自閉症の原因	脳の障害	124(96.1)	96(71.6)
	親のしつけの悪さ	0(0.0)	2(1.5)
	環境の変化	5(3.9)	20(15.0)
	親からの虐待など	0(0.0)	9(6.7)
	薬の副作用	0(0.0)	2(1.5)
	無効	0(0.0)	5(3.7)

人数（%）
n＝263

表5　自閉症に対する認識度に関する項目

項　目	学習群（129名）	非学習群（134名）
理解している	14(10.8)	2(1.5)
少し理解している	66(51.2)	28(20.9)
普通	31(24.0)	19(14.2)
あまり理解していない	18(14.0)	64(47.7)
理解していない	0(0.0)	21(15.7)

人数（%）
n＝263

表6　その他の障害に関する用語についての認識度

項　目		学習群（129名）	非学習群（134名）
ADHD	はい	125(96.9)	34(25.4)
	いいえ	4(3.1)	99(73.9)
	無効	0(0.0)	1(0.7)
LD	はい	127(98.4)	51(38.1)
	いいえ	2(1.6)	82(61.2)
	無効	0(0.0)	1(0.7)
軽度 MR	はい	74(57.4)	17(12.7)
	いいえ	55(42.6)	116(86.6)
	無効	0(0.0)	1(0.7)
てんかん	はい	104(80.6)	43(32.1)
	いいえ	25(19.4)	90(67.2)
	無効	0(0.0)	1(0.7)

人数（%）
n＝263

Presented by Medical*Online

6．その他の障害に関する用語についての認識度

ADHDについて，学習群は96.9%，非学習群は25.4%となり，有意な差が認められた（χ^2=139.7, df＝1，p＜0.001）（表6）。LDでは，学習群は98.4%，非学習群は38.1%で有意な差が認められた（χ^2=108.6, df＝1，p＜0.001）（表6）。

軽度MRでは，学習群は57.4%，非学習群は12.7%であり，有意な差が認められた。（χ^2=57.42，df＝1，p＜0.001）（表6）。てんかんについては，学習群は80.6%，非学習群は32.1%となり，いずれも有意な差が認められた（χ^2=62.01，df＝1，p＜0.001）（表6）。

Ⅳ．考　　察

学習群と非学習群とを比較すると，非学習群のように自閉症について学ぶ機会のない学生には，自閉症という用語は知っていても，その症状や原因などについてはあまり理解されていないこと，他の障害との区別があまりなされていないこと，同じ学生でも学ぶ内容が違うだけで知識に大きな差があることがわかった。また，自閉症という用語を何で知りましたかという問いに関しては，情報の収集源は主にテレビや授業であったが，授業に関してのみ有意差が認められた。したがって，自閉症という用語の認識に関して，授業の果たす役割がきわめて重要であるということがわかった。次に，自閉症の症状に関連する用語であるが，自閉症特有のオウム返しやこだわりに関する認識度について[6]，χ^2の値から判断すると，他の症状よりもより顕著な差が認められている。したがって，小児の障害に関する科目を学習することにより，自閉症特有の症状を理解したといえる。

なお，ADHD，LD，軽度MR，てんかんという用語に関しても，学習群と非学習群とで比較した時に，すべての用語に有意差が認められており，授業が重要であることがわかった。

本調査結果より，授業で自閉症について学んでいる学生と学んでいない学生とでは，自閉症の認識度に明らかな違いが認められた。

ところで，今回の調査結果から，非学習群では自閉症という用語を知っていても，原因について正しく理解している人の割合は低かった。また，社団法人日本自閉症協会が2004年10月から11月にかけて行った自閉症者に対する意識調査では，自閉症を知っていると回答した女性が約90%，自閉症の原因について脳機能と回答した女性は約70%であり，本研究の非学習群の結果とほぼ同じ傾向を示した[7]。これらの結果から，非学習群のように自閉症について学ぶ機会がない学生は，小児に関して専門的な教育を受けていない一般の人々と同様の意見であると考えられる。したがって，本研究の非学習群の結果が一般の人々の認識度として推測される。

本研究では，自閉症の症状および自閉症に関する用語について，非学習群ではパニック（70.1%），耳ふさぎ（48.5%），奇声（44.8%）という一般的な症状に関する項目については，比較的認識度が高いという結果が得られたが，高機能自閉症（4.5%）やアスペルガー症候群（2.2%）といった知的に遅れのない発達障害に関してはほとんど認識されていないという結果が得られた。自閉症児の中には知的障害がみられないものも含まれている。しかし，これらの結果から，非学習群や一般の人々は，高機能自閉症を自閉症としてひとくくりにしたり，障害すべてをひとくくりにみているとも考えられる。しかし，症状は十人十色で，自閉症と診断された人がみな，同じ症状であると考えるのは大きな誤解である。

ところで現在，自閉症が約2,000人に1人，広汎性発達障害は約100人に1人の割合で発症するといわれており，かなり身近な存在となっている。したがって，私たちをはじめとする健常者が生活していくなかで，自閉症などの障害を有する人達と接したときに，一般の人々が差別をしたり偏見を持ったりしないようにするには，正しい知識を身につけ，障害者一人一人に適した対応がとれるようになることが重要であると考える。

自閉症の人達が誤解や偏見を持たれないようにするには，一般社会の人々が自閉症についてより良く理解するように求められている。それには，自閉症に関する正しい知識が得られる機会を増やしたり，自閉症に関する教育の充実を図ったりするなどの対策を立てることがきわめて重要であると考える。

Presented by Medical*Online

今回の調査で，自閉症をはじめとするさまざまな障害に関する認識度について，非学習群は学習群よりも明らかに低いという結果が得られた。そこで，短期大学在学中に非学習群に対しても，小児の障害に関する授業を受講させることにより，非学習群の認識度を向上させ，将来的には，一般の人々が障害に対する誤解や偏見を持つ状況を少しでも改善できるのではないかと考える。

一方，小児に関して専門的に学ぶ学生は，将来保育士，幼稚園教諭，養護教諭等の専門家として活躍が期待されている。これらの学生たちが将来，専門職に就き，自閉症に関する正しい知識を一般の人々にも教育，指導し，自閉症に対する誤った認識をなくすように努力していく必要があると考える。

謝　辞

本研究を遂行するにあたり，協力してくださった岐阜聖徳学園大学短期大学部卒業生である高尾明日香さん，脇田亜紀子さんに深謝致します。

文　献

1) 平林伸一．広汎性発達障害と注意欠陥／多動性障害―鑑別と重複診断の是非をめぐって―発達障害研究　2003；25：1-7.
2) 山形崇倫．自閉症の遺伝学―自閉症の病因遺伝子解明研究の現状―　発達障害研究　2003；25：8-16.
3) 稲垣真澄，白根聖子，羽鳥誉之．自閉症の臨床神経生理学的研究―誘発電位と事象関連電位を中心に―　発達障害研究　2003；25：17-23.
4) 川瀬正裕，伊藤友紀乃．一般における自閉症の認識に関する調査研究．日本教育心理学会総会発表論文集　1993；35：382.
5) 齋藤陽介，大澤　亮，森山哲美．自閉症についての情報提示が一般の人々の自閉症に対する認識の変化に及ぼす効果．日本行動分析学会年次大会プログラム・発表論文集　2003；21：86.
6) 日本自閉症協会．自閉症の手引き．2004：1-20.
7) 自閉症者に対する意識調査
Available at：http://www.autism.or.jp/report05/mediaguide/ishikichousa.pdf Accessed April 1, 2007

Presented by Medical*Online